

日本カトリック司教団

平和についての司牧教書

平和への望み

——日本のカトリック教会の福音的使命——

平和についての司牧教書「平和への望み」発表にあたって

教皇ヨハネ・パウロ二世は、回勅「いつくしみ深い神」の中で、現代の不安は「人道主義的な幾つもの宣言にもかかわらず、人間に対する物の上位を受諾している社会」から来る不安であり、「地球上の人間の生存の意味自体と結びついた人間と人類の未来のための不安です」と述べ、「決定的な解決を求めて、強く人類に迫っています」と語っておられます。

私たち日本カトリック司教団は、この不安の一つであり、今日の緊急課題の一つである平和の危機と日本のカトリック教会が取り組む姿勢を司牧教書としてまとめました。司牧教書とは、司教が宗教的見地からある緊急課題について、その考え方、解決への方向性を示すものです。

今日、世界各国の司教団は、その国のおかれている状況にあわせ、「平和」や「生命」などについて司牧教書を発表しておりますが、その表現、内容は異なっています。そのためある国の司牧教書が他の状態の異なる国にとっては具体的な指針や実行目標とならないこともあります。しかし、現代のような国際社会にあっては、互いに関係し合うものとして、参考にしなければならぬことも確かです。

平和についての司牧教書は、現代の日本の状況の中であって、「平和」建設のためにどのように考え、働いたらよいかについて、キリスト者に向けて書かれたもので、日本の社会に生きる人たちにも役立つものと思われまます。今日私たちが考えなければならぬ問題、見るべき問題は数多くあります。この教書では、平和に関するいろいろな問題に対して具体的な解答や方向についてすべてはふれてはいませんが、それらについては、今後の福音に照らされた研究と議論をまつことにしました。

しかし、今日の緊急課題である「平和への望み」を私たちはどのようにして実現しなければならないかを示しました。当然のことながら、教書を発表することで問題が解決されるわけではありません。今後は、この教書をもとにして平和のために何ができ、何をしなければならぬかを一人ひとり考え、実行して下さることを期待しています。

一九八三年七月九日

日本カトリック司教団

平和についての司牧教書

平和への望み

——日本のカトリック教会の福音的使命——

平和への願望が、地球上にみなぎっています。

これは、戦争への不安が暗雲のように地球上を覆っていることを意味しています。その現象として、東西両陣営の対立、恐るべき量の核兵器の開発備蓄、先進国と発展途上国との間の悲劇的ともいえる経済的格差、国家内の対立、抗争など、多くの種類を数え上げることができます。それらは、現実到大勢の人々の理不尽な死や苦しみを生んでいるばかりでなく、人類の存続そのものを脅かす可能性をもっており、私たちは一人ひとり、個人としては平和を望みながらも、そうした地球的、国際的な大きな力関係のなかで、ともすれば無関心になったり、無力感に襲われたりしているのが現実です。

しかし、現在の私たちの存在が、結局は人類の未来を支え創り出すことになる、ということを考えれば、とりわけ、キリスト者として、神の愛の業によって人類が創られ、その計画の完成に自ら参画する存在であることを信じている限り、真の平和の建設は、信仰の根本に関わる問題として、私たち一人ひとりに委ねられている緊急かつ重要な課題であると言わなければなりません。

平和を脅かすものに対して

核戦争の脅威

教皇ヨハネ・パウロ二世は、広島での「平和アピール」で、「ヒロシマ」を考えることこそ、核戦争を拒否し、平和に対して責任を担うことになるのだと、強く訴えられました。今日、東西の核超大国には、世界の総人口の数十倍以上の人間を殺りくするに足る核兵器が貯蔵され、いつでも使用できる態勢が整っています。しかも両陣営は、イデオロギーや社会体制の中で、猜疑心、危機意識の増幅によって、核兵器の増産と新しい兵器の開発と配備の「軍拡競争」を続けています。

そのうえ、こうした核兵器は、東西両陣営にとどまらず、さまざまな難問を抱えて苦しむ第三世界にも、紛争を解決する安易な手段として拡散しようとする傾向にあります。その意味では、核戦争の危機は、東西両陣営のイデオロギーや社会体制の対立を超えて、現実のものとなつているとさえ言えます。

しかもその背後には、軍事によって成り立っている産業組織が介在し、巨大な権益を分け合っているという事実を指摘しないわけにはいきません。

核兵器を使うということが、人間の生命と尊厳にとつて、どれほど非業な行いであるか、そのことを世界に訴え、子孫に語り継いで行くことのできる体験をもつ私たちは、一切の政治的なおもわく抜きに、新しい核兵器の実験・生産・配備の停止と全ての核兵器の廃棄に向つて、最大、最善の努力を払うこと、そして非核地帯が東アジアそして世界へと拡がっていくことを世界に向つて要求します。

南北の格差

今日世界の平和を脅かすもう一つの原因は、「南北」問題でありましょう。

最近の統計の示すところでは、世界の資源の四分の三は、世界総人口の四分の一しか占めない先進国の人々によって消費されています。発展途上国同士の間での格差もまた大きいために、いわゆる最貧国の貧しさは想像を超えています。人々は、貧しく生きているのではなく、貧しく死につつあるとしか言えないからです。世界の総人口約四十五億の割に当る四億五千万の人間が飢餓ないし栄養不良に苦しみ、三億人以上の子供が成長を決定的に阻害されています。良質の飲料水に恵まれない悩む人々は総人口の半数にも達し、一億三千万の子供たちが初等教育も受けられない状況です。さらに、文盲の成人は八億七千万人もいます。

このような南北の格差は、最近ではかえって深まりつつあり、資源を輸出する発展途上国が、このような不公正な格差を産み出すような形で資源輸出を拒否するという方法で、先進国の既得権益に挑戦し始めました。世界の権力的秩序や既得権益の構造を変えていこうとする動きが、途上国の側に表面化しているのです。日本を含む先進工業国は、こうした動きの真の意味を必ずしも正面からとらえていないようです。資源消費国相互の競合関係をどう調整するか、という自分たちの間だけの分け前の議論にとどまり、ともしれば、その資源を消費するための所得をもち得ない世界人口の四分の三の人々のことを忘れ勝ちです。

しかも、東西の諸大国の軍備拡張に伴って、先進国からの武器の輸出、一次製品の安価な買上げと加工工業製品の高価な売込みなどはますます途上国の置かれた状況を悪くしています。それは国際間の問題のみでなく、途上国内部の社会構造にまで深刻な影響を及ぼしています。つまり、南北の格差

をめぐる問題は、途上国の内部に東西の対立関係を持ち込み、民衆の生活から平和を奪っています。そのために祖国を失い、飢餓に瀕している難民の数は一千万を超えている現状です。

公正な秩序を目指して

東西の対立から生れた軍拡競争は、南北問題に否応なく絡んできています。南北問題の解決には、まず南の発展途上国が経済的に自立することが必要で、それが格差解消の出発点になりましょう。そして、そのために北側が行うべきことが何であるか、北側は自分たちの権益の擁護という観点を離れて、真剣に取り組まなければなりません。特に、国際的にも国内的にも、底辺にある国や人々の自立を目標にして、平等で公正な秩序の確立に向けて、あらゆる努力を傾注することが重要であります。例えば、軍備に費やされる巨額な経費の幾分かでも地上の飢餓、病苦、文盲の克服に転換することができます。できれば、多くの問題が解決されるのです。

これらの世界の平和を乱している不公正は、結局は、強いもの、富めるものの飽くなき欲望の充足を主要な動機としてもたらされております。私たちキリスト者は貧しく、苦しんでいる人々の心と生活から平和を奪い去っているこの現実を、どうして黙許できるでしょうか。その点で教会は、より公正な世界と社会の秩序の確立、ことに、紛争解決と平和維持機構の建設への道を示す責務があります。そして、世界の現状において、核の脅威が増大している反面、各国間の相互依存関係がますます密接になっている今日、核兵器をもたず技術的にも水準の高い日本は、世界平和維持機能の強化のため率先して貢献すべきであります。

日本のカトリック教会の使命

「時のしるし」

前大戦における戦争の当事者として、私たちは、アジア諸国の人々をも含めて、一千万を越える人間の死に責任をもっています。私たちの今の状況は、私たち自身が平和への重大な侵害者であったことへの、厳粛な反省の上に成り立っているはずです。しかも私たちは、原子爆弾という核兵器の爆撃を二度にわたって受け、また敗戦という決定的状況をも体験しました。これらは、平和への望みと意義に対して、私たちの眼を開かせてくれる「時のしるし」と言うべきものであります。

このような「時のしるし」は、大戦後の私たちの手にある平和憲法の中にも認めることができます。そこにみなぎっている平和への決意をあらためて確認することに躊躇があつてはなりません。むしろそれは、私たちの手に委ねられた、真の平和実現への一つの手だてとみなすことができます。さらに、現教皇ヨハネ・パウロ二世がわざわざ原爆の地広島・長崎に立ち寄られ、そこで、預言者的言葉で、私たち日本人に平和創造への努力を強く促がされたことも、「時のしるし」であると思われまふ。これら「時のしるし」の指し示す行手をはっきりと見定め、その上に私たちの歩む道を開き得ないとしたら、日本の私たちは怠慢と不誠実のそしりを免れないのではないでしょうか。私たちは、世界とその未来に、それだけの責任を負っていると一言しなければなりません。

福音の照らし

現代人は、その存在の奥底から平和を希求しています。しかし、その求める平和がいかなるものであるか、また、平和をどこに求めるべきであるかについて、闇路を手さぐりで歩む者のような状態にあるということができないのではないでしょうか。たとえば、世界の多くの指導者は、平和が力の優越によってのみ得られると信じ、あるいは、少なくとも、力の均衡のみが平和を維持する唯一の方法であると主張しています。ここから、今世界の平和を根本から脅かしている軍拡競争が生じ、核戦争の危険が止まるところを知らず増大しているのです。この単純な道理は万人の認めるところでありながら、この愚かな軍拡競争を止めることができないのが、現在の世界の実情ではないのでしょうか。

キリストは、世の救いのため、十字架上で命をささげる前夜、弟子たちとの最後の晩さんの席で、「わたしはあなたたちに平安を残し、わたしの平安を与える。わたしは世が平安を与えるようには与えない」（ヨハネ十四・二七）と言われました。キリストが与えようとする平和はいかなる平和なのでしょいか。また、いかにしてキリストはその平和を与えようとするのでしょうか。

それについて聖パウロは、エフェソ人への手紙の中で、「実に、キリストご自身こそ、わたしたちの平和であり、互いに離れていた二つのものを一つにしたかたです。キリストは、ご自分の体によって、人を隔てていた壁、すなわち、敵意を取り除き、………平和を実現しました。すなわち、キリストは十字架によって互いに離れていた二つのものを一つの体とし、神と和解させていただきました。」（エフェソ二・十四―十六）と述べています。

ここに、平和がいかにしてもたらされるかが示されています。すなわち、キリストが十字架上の死を通して示された自分を捨てた愛によって、人々を隔てている敵意という壁をおし倒すことによって

のみ真の平和に達することができるといふことです。換言すれば、「神との和睦」、すなわち、罪を取り除き、神との正しい関係を取り戻すことによつて、人々が互いに和解する時のみ、平和が生まれるのです。

現代の平和への脅威の原因は、国家間の相互不信と敵意であるのではないのでしょうか。相互信頼と愛があるならば核兵器の存在の理由さえなくなるのです。

相互不信と敵意を除くため福音は無力なのでしょうか。決してそうではありません。神の恵みに支えられた人々の生涯と教会の歴史は、神のいつくしみを証しつづけてきたということを思い出すことは今日大切なことではないでしょうか。

どんな困難な状況に直面しても、私たちが平和に対して絶望しない根本的な理由は、神の人間に対する愛といつくしみと、さらにそのゆるしへの信頼にあります。

キリストは山上の説教の中で、「平和をもたらす人は幸いである、その人は神の子と呼ばれるであらう」(マタイ五・九)と言われました。神の子と呼ばれることは最大の誇りであります。キリストの時代にも平和が脅かされていきました。キリストは人々の平和の願いがいかに深いかを知っておられたのです。それ故にこそ、平和のために働くこと、平和を創り出すことをその弟子たる者の最大の使命として示されたのです。

第二次大戦後、歴代の教皇は、世界の平和の建設を力強く呼びかけてこられました。ヨハネ二十三世は回勅「地上の平和」を、パウロ六世は回勅「諸民族の進歩」を発表されました。そして、ゆるしといつくしみと祈りこそ平和の原点であると主張する回勅「いつくしみ深い神」を発表された現教皇ヨハネ・パウロ二世は、来日の折広島でまことに印象深い「平和アピール」を発表され、戦争の放棄、軍縮と核兵器の廃絶、平和への呼びかけを極めて具体的に訴え、平和への道を繰り返し示されました。

これらは、キリストに従う者の使命と義務の自覚の結果にほかなりません。そして、キリストの弟子としての私たちもまた、「己れを捨て、日々、自分の十字架をになつて」(ルカ九・二三)キリストの歩みに従うと約束した以上、神の平和の実現のために、それぞれの置かれた場所で、あらん限りの努力を積み重ねる使命と義務があることを、自覚しなければなりません。

回心の必要

平和への道は、私たちの一人ひとりがキリストの小さな兄弟たち、つまりは私たちの隣人たちに、一体何をなすべきであるのか、ということと、本質的に結びついていることがわかります。

核保有国に核凍結を要求すること、軍拡競争を走り続ける国々に立ちどまることを要請すること、国際的に公正な秩序を打ち立てるよう働きかけること、こうしたことがらは大切な主張です。しかし他に対して要求するだけで、私たちの、責務は終らないこともまた、明らかであります。むしろ、私たち自身、何よりもまず、本当に平和を望んでいるのか、どんな犠牲を払ってでも平和を望むのか。これを自らに問いかけることから出発すべきであるように思います。

ともすれば私どもは、平和を望むと口では言いながら、その実、平和をはるか手の届かない空の彼方に置いて、ただあそこへ行こうと望んでいるだけではないでしょうか。自分自身のなかに神の平和を実現する意志があるかどうか、まともに見つめるべきではないでしょうか。

そのとき、自ら自分の心をキリストの歩んだ道にあらためて向け直す、という「回心」の姿勢をとることができ、神の平和を創り出すに当って払わなければならない犠牲や苦痛の大きさにたじろがぬだけの勇気が得られると思います。

平和建設のために必要な回心、それは、神との和睦によつて福音的な秩序をつくることであり、隣人への愛徳に基づいた人間関係を拡げるために、自己の權益に固執することから離れて、愛の眼で人を見るといふ新しい心に変わることであります。キリストへの信仰は私どもを「新しい人につくり」(エフェソ二・十五)かえるものなのです。

教会に集まる人たち同士、家族同士、職場の仲間同士が話し合うことから始め、具体的な目標に向つて行動を起こしましょう。

物質主義との訣別

私たちは一日に膨大な量の割りばしを使い捨てにしています。何気なく、むしろ清潔な習慣であるといふ多少の自負や満足感さえ感じながら………。しかし、そのために、大自然のかけがえのない樹木が、とりかえしのつかない打撃を受けつつあるのをごぞんじでしょうか。

「神の平和」と「割りばし」、笑われる方もあるでしょう。核軍縮の話は大事だが割りばしなんて些細な話を、とお怒りになる方もあるかもしれません。けれども、私たちの心のなかに、物質的豊かさへの飽くなき欲望、どれほど豊かになつてもなお一層渴^がえたように、より豊かな物質生活を求め続けようとする望みがあつて、それが気付かぬうちに、貧困や自然の破壊に直接つながつていふという事実を知るには、割りばしはよい例だと思ひます。すでに述べましたように、第二次大戦下に日本はアジアの諸国に軍事的立場から大きな打撃を与えました。その深刻な反省の上にあるべき今日の日本が、再び軍事的侵略ならぬ経済的侵略を行ない、固有の文化を否応なく奪ひ、物質主義的悪弊を輸出していると非難されるのは、決してゆえなきことではないのです。

物質的豊かさを一切捨てるということは現実的には不可能です。すべての人間は、人間らしい尊厳を保ち得る生活を営む権利があります。しかし、私たちの今の豊かさが、誰かの貧しさの上に築かれ、誰かの心と生活の平和を奪うことによって成り立っているとしたら、私たち自身、キリストに従う道に反することにならないでしょうか。それに少しでも気付けば、私たちの日常生活の些細な事柄の一つ一つに、その配慮が生まれて来るはずで、キリストが示された簡素な生活こそ、現代の人間生活のあるべき姿であり、物質主義の悪弊から脱け出す新生の原点だといえます。

真の「草の根」へ

私たち一人ひとりのそうした些細な努力が、結果として大きな実を結ぶことは確かです。しかし、ひとりの意志の力は、ひとりだけでは弱いものであることもまた否認しません。この世に眼に見える制度や組織がある一つの理由は、まさしくそうした一人ひとりの力をもち寄って、その輪を拡げていくことにあります。

「草の根」という言葉があります。名もなき市民たちがその意志を結集しようとするときに使われる言葉です。私たちは、神の前に平等となつて一人ひとりが、心をわかちあつて築き上げて行く草の根的存在として手をつないでいくのです。それぞれの地域、それぞれの場所で、神の平和の実現につながる方向に、手を携えて少しでも歩みを進めようではありませんか。

社会の中で

しかし、一方から見れば、人々が集って集団を作ったところから争いが出発するとも言えます。たとえ一人ひとり、基本的には平和を望んでいるとしても、それが結集して集団や組織の意志となつたとき、そしてそうした集団が、お互いにすでに得たこの世の権益を守ろうとするとき、そこに争いが生まれます。それゆえに、私たちは、あらためて、教会という共同体だけは絶対的な平和を求め、「多」を神の平和において「一」とするものとして存在する、ということ強く決意しなければならぬのです。

平和国家と好戦国家とがもともと分かれているわけではありません。ある状況のなかで、相互の権益が対立したときに、不幸にして国家は争いを予想する存在になります。国民は国家の一員として、国家に対してある義務を負い、また国家は国民に対してある義務を負います。国民の権益が国家によって守られ、それに対して国民が国家にある形での奉仕をするという点は認めなければなりません。しかしこのような国家という組織のなかにあつて、なお権益にとらわれず、世界の共同の善のために貢献しようとする共同体の活動へ参画する個人の意志は尊重されなければなりません。

そのような権益の衝突と、その間の相互不信とを、わずかずつでも崩して行くのは、一人ひとりの人間だと思ひます。私たちが、少しでもより多く往き来することによって、これもまた「草の根」から、互いに知り合い、さらには国家の権益とは無縁のところでものを考える可能性を築き、相互不信を相互信頼へと変え、それによって父なる神のもとですべての人間が兄弟であることを実践していくことが大切だと思ひます。

子供たちへの働きかけ

平和への課題は、次の世代を担う若い人々、子供たちに対する教育の面でも欠かせないと思われま
す。よく言われるように、子供は大人をうつす鏡です。大人は子供の模範となるべき鑑でもあります。
社会を構成している私たち大人の一人ひとりが相互不信から相互信頼へと変らなければ、子供が変れ
るはずがないのです。

同時に、子供たちの教育のなかで、もっと有効な平和創造への手だてを伝えて行く方法を考えなけ
ればならないと思われます。それは何ごとにつけても平和を叫び、平和は大事だと主張することでは
ありません。今平和を脅かすものは何か、という問について、他人に責任を負わせて評論するのでは
なく、自分自身のなかにその答えを見出そうとするための手助けを、あらゆる場面を利用しながら、
積み重ねて行くべきでしょう。

真の平和へ

こうして私たちは、あらゆる努力と犠牲を惜しまず、真の平和の実現に向って、知識と智恵とを動
員すべきです。しかし、それだけのことを尽したとしても、それで私たちは確実に平和を購かうことは
できません。真の平和の実現には、神のゆるしといつくしみにのみ委ねられる部分が残っているから
です。そして、これが平和へ進む原動力であります。

教皇ヨハネ・パウロ二世は、神のいつくしみこそが平和をもたらす鍵であると述べておられます。

私たちもこのいつくしみを自分のものとする必要があり、そこに「放蕩息子のたとえ」の教える意味があるのです。いつくしみは、世界と人間の中に実際にある悪いことから良いものを見出し、引き出すときに現われるものなのです。真の平和は、多くの要素をもった人間関係、社会関係の中に正義だけでなく、福音の示す「いつくしみ深い愛」を、「ゆるし」を持ち込むときに生まれるものであります。ゆるしは、罪よりも強い愛が世にあることを示すのであり、神と人間の関係だけでなく、人々の間の関係の和解の基本ともなっています。このため、私たちは祈ることを決して忘れてはなりません。その祈りに支えられてこそ、私たちは、現実には平和への小さな行動を積み重ねて行くことができます。もちろん、私たちの平和への努力は非暴力でなければなりません。それらの行動はつねに困難を伴うもので、自身に及ぶ苦痛をも甘受しなければならぬこともあります。教皇ヨハネ・パウロ二世は、今年を「あがないの特別聖年」と定め、神のいつくしみのあらわれであるキリストのあがないを今こそ生きるようすすめておられます。地球上にみなぎっている平和への望みを真剣に考え、平和の実現に取り組むことは、日本のカトリック教会の福音的使命であり、このあがないの実践であります。

「平和をもたらす人は幸いである

その人は神の子と呼ばれるであろう」（マタイ五・九）

一九八三年七月九日

日本カトリック司教団

「平和への望み」

一九八三年七月二〇日発行

一九八七年四月二〇日第三刷

定価 五〇円

発行所 カトリック中央協議会

発行者 日本カトリック司教団